

# 海部の地理(十一)

—津久見市—

矢野彌生

(会員・佐伯市山区)

保戸島の漁業集落

—景観変遷史的視点から—



保 戸 島

大分県におけるマグロはえ縄漁業の基地として、めざましい発展をした保戸島そのことが集落の変貌にどのように影響を及ぼしたかまた更に、大正十四年(一九二五)に刊

行された柳田国男の『海南小記』には「穂門の二夜」(一)と題して、保戸島の自然や集落の形態・構造・配置・風俗など民俗学的な事象が五ページにわたって記述されており、戦前の様子を知ることが出来る。筆者が保戸島を調査したのは昭和五十九年八月と六十三年七月の二回であるが、大分大学教育学部の地理学教室が昭和三十五年、同五十一年七月と翌年の三月の三回調査をしており、調査報告書(2)も発刊されている。本稿ではこれらの調査報告を基に一離島を景観変遷史的な視点から記述してみたい。

集落立地と 保戸島は津久見港の東方一四キロメートル

自然環境 ルの豊後水道に位置する。また、津久見湾

と佐伯湾を分かつ四浦半島の先端からわずか一〇〇メートルの水道を隔てた面積〇・八六平方キロメートル、周囲四キロメートルの小島である。

島にはほとんど平地がなく、標高一八四メートルの遠見山を頂点とする急峻な傾斜で、そのまま山地が海岸に迫り、起伏の激しい岩石によって囲まれている。北及び南東側の海岸線は絶壁になっていて、遠見山より北東に



海岸から山腹に密集する集落



図1 保戸島の自然概観図及び土地利用図  
(勝目忍原図)

点在する高甲岩をはじめとする小岩礁群は、豊後水道の激しい潮流に洗われている。

地質は全島古生層よりなり、絶壁の部分がチャート、他の部分は砂岩に覆われ、所によっては中世層の粘板岩との瓦層をなしており、このことから保戸島は四浦半島の一部であることが分かる。島の西側のわずかな平地と埋立地に七百五十一戸の集落が立地していて、山腹まで住宅が階段状に密集して建っている。

保戸島は『和名抄』の「海部郡穂門（ほと）郷」の名を継承した島である。中世末にはかなり開発が進んだらしいが、その詳しい歴史は不明である。島の『加茂神社縁起』には、天文四年（一五三五）の創始とある。江戸期には佐伯藩の勘場や遠見番所が設置されていた。

昭和二十年七月、太平洋戦争末期には、米軍爆撃機の直撃弾が保戸島小学校に落ち、教師二人を含む児童百二十七人が爆死した。そして、戦後は東九州随一の遠洋漁業の基地として発展している。

表1 保戸島の人口および世帯数の推移

(単位：世帯、人)

年	世帯数	人口	年	世帯数	人口
明治11	282	1495	昭和5	477	2594
15	285	1572	10	539	2570
20	276	1662	15	536	2445
25	289	1623	25	573	2882
30	280	1751	30	543	3048
36	323	1786	35	559	2871
41	336	1883	40	584	2829
大正2	342	1924	45	576	2868
7	371	2138	50	672	2814
9	367	2373	55	744	2766
12	417	2361	60	747	2644
14	434	2450	平成2	751	2449
昭和1	438	2497			

(『統計でみた大分県』〈昭和44年〉『国勢調査報告』による)

人口と世帯数の推移

十年(一九五五)以降は全般的に横ばい傾向を示している。このことは、周辺の四浦半島の集落が過疎化現象が

若干の増減を伴いながら増加し、昭和三十

〔超過密の島〕 保戸島の人口は表1に

示すように、明治・大正・昭和を通して

著しい中であつて、極めて特異な現象として注目される。この背景としては、昭和四十年以降の保戸島の経済的基盤の確立と発展に負う所が大きい。また、世帯数についても、生活力の旺盛な若年層の核家族化により、同四十年以降かなり増加している。

人口密度は、一平方キロメートル当たり二千八百四十八人(平成二年(一九九〇))と非常に高く、更に集落地可能な自然条件を勘案した実質居住面積からすると、超過密の島ということが出来る。

大正九年(一九二〇)に保戸島を訪ねた柳田国男は

家は近年になつて大分増加したものらしい。今でも行き当たるほど子供や女の数が多いの、もう半月もすると吉岐五島の方から、三百何十人の男たちが、漁を終つて戻つて来る。其時だけは真に寝る所も無いそうである。だから半分は人の家に行つて寝る(3)。

と述べている。

保戸島では、世帯数や人口増加に対処するために次の三つの方法が取られた。

1 傾斜面の克服。古い絵図と現在の集落を比較してみると、かなりの住宅が山の中腹あたりまで立地し

ているが、地形的制約と建設費の上昇から限界に来て  
いると考えられる。

2 海岸部の埋め立て。大正期の新地地区の埋め立て、  
昭和五十年に始まる漁協による大波磯地区の埋め立  
てが挙げられるが、これも海岸線に急崖が多いため  
限界に達している。

3 津久見市（本土）への居住。これは若干の事例が  
見られるが、出漁準備や家族・親戚相互の連絡の不  
便さから余り進んでいない。

土地利用 土地利用に関しては、柳田国男は「周  
の変化 一里余の島は、見た所九分通り島で、ト  
ウイモばかり作るかと思う程だが、夫で

もまだ足らぬという。野菜は自分たちと相乗りして、昨  
日も沢山に輸入せられた。島には何としても作る余地が  
無いのである。段々畑の頂上には、それでも泉を養う少  
しの林がある。其左手の小さな森は以前の物見所で、登っ  
て見ると中には島人の墓がある。樹の間から伊予の山が  
見え、又水之子の灯台が見える。島の東側もやはり皆畑  
で、裾の方には四反ほど水田もあり、小舟で島をまはっ

て之を耕して行く。之に灌漑する池もあり」（4）

と記述しているが、昭和三十五年（一九六〇）には

「耕地はすべて畑地で、水田は一枚もない」（5）

と記されており、大正期の水田は、畑地へと転換され  
ている。

また、作付け品目に関しても、柳田国男の記述にある  
「タウイモ」つまり豊後方言の「トイモ」「トウイモ」  
である甘藷は、昭和三十五年当時も表作的なものであり、  
裏作では麦を作っていた。その他、若干ではあるがソラ  
マメ三反、ナス一反、キュウリ二反、大根四反、白菜一  
反と記されており（昭和三十五年）、食料の自給は不可  
能であり、相当量の食料品が島外より移入されていたも  
のと考えられる。

現在では図1に見られるように、大部分の耕作地が放  
棄され、島の中央部の集落に近接した耕地だけがわずかに  
耕作され、甘藷・里芋・豆類などが栽培されている。

集落の形態と

構造の変化

（集落配置） 初めて保戸島の集落

に接したとき、その色彩の鮮やかさと鉄筋コンクリート造りの立方体や



保戸島の集落の狭い道路

直方体の家々が海岸から山の中腹まで重なるように積み上っている様子は（まるで別府のホテル街のようだ）とつぶやきたくなるような強い印象を受ける。

集落配置を見ると、集落は南から串ヶ脇・新地・浜小路・海道・上小路・中ノ谷・谷・大波磯（おおばそ）の八地区からなる（図1参照）。

これらの集落は、北及び東側を山地で防ぎ、南西岸の谷筋や山麓に密集して立地している。

居住可能面積が地形によって著しく限定されているため、各住宅（家屋）同志が密集しながら道路あるいは石段（階段）に沿って連絡している。その道路や石段も極めて狭く、道路幅も〇・五メートルで、急勾配になっており、海岸通りのメインストリートですら幅一・五メートルを超えない。

柳田国男は

全体に平地はちつとも無い島である。見上げるような傾斜地に、同じ様な家が不分明に建て続けている

と述べ、保戸島の特徴と集落配置を説明しているが、現在もこの基本的な特質は全く変化がない。

〈集落形態の変化〉 戦前に出版された龍豊山海徳寺境内之図（図2）及び村社加茂神社境内之図（図3）の両図（6）から、集落形態の変化を考えてみよう。絵図によると、住宅は海徳寺から低位の海浜及びそれに連続する傾斜面に密集して立地（いずれも平屋）、現在のようにに寺より上位のより傾斜の急な所には住宅は見られない。

また、寺の背後の墓地は西に面した高燥地にあり、西

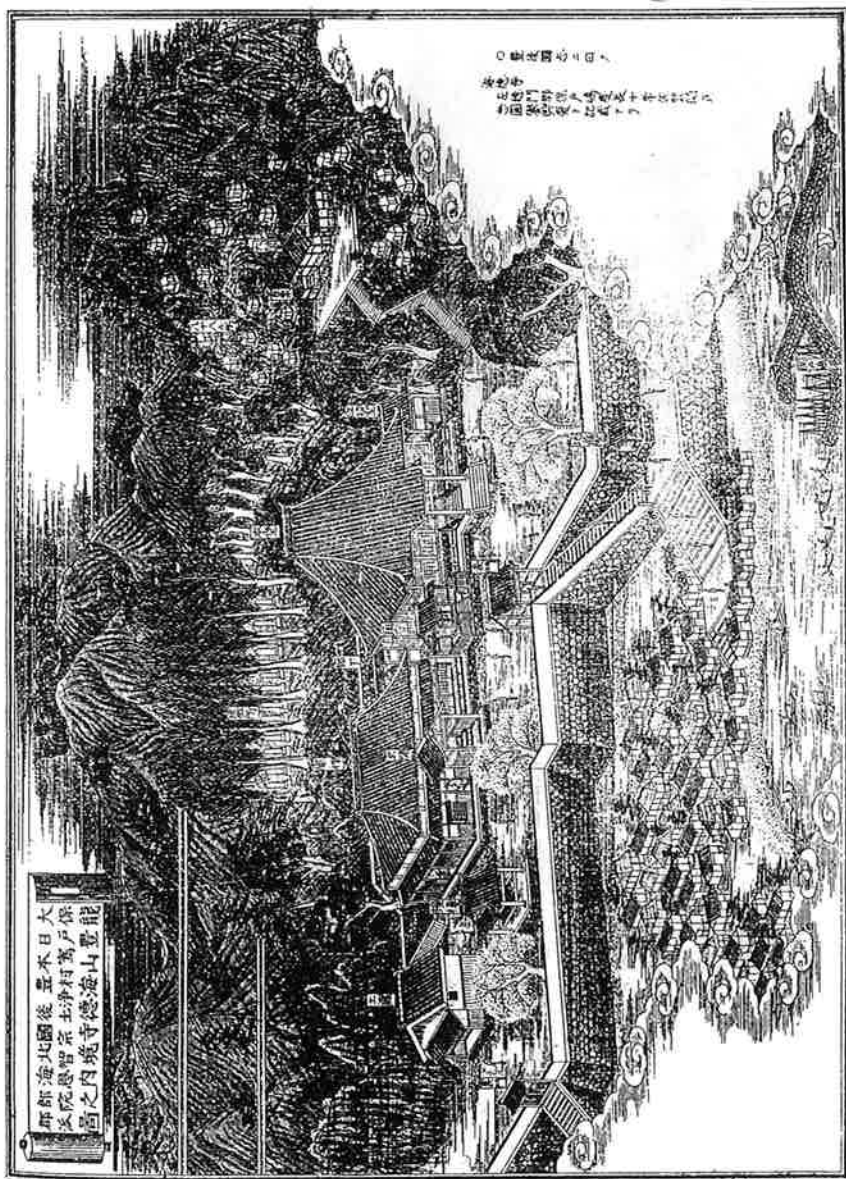


図2 龍豊山海徳寺境内之図

(『大日本帝國大分県社寺名勝図録』明治37年による)

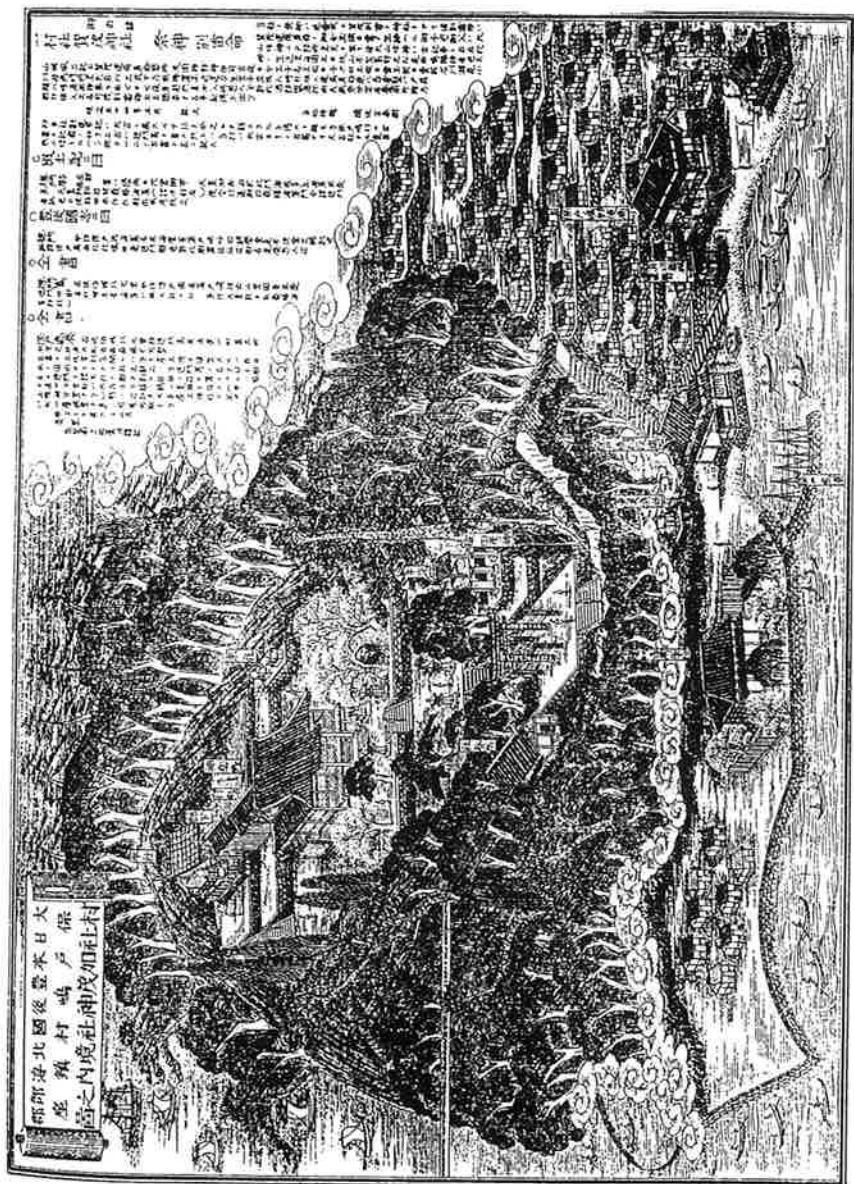


図3 村社加茂神社境内之図

(『大日本帝国大分県社寺名勝図録』明治37年による)

方浄土の信仰と共に、漁民の墓あるいは先祖に対する最大の敬意を表わしている。墓所の場所は現在も全く同一の場所を占めており、集落全体を後方より庇護するような配置になっている。

図2・図3の絵図を検討してみると、浜小路・海道・中ノ谷・谷の各地区には既に集落が確立していて、村役場・郵便局の位置も現在と一致している。そして、大磯地区には徳門（ほと）尋常小学校と八戸の漁家が見られるが、家屋の立地状況が、海徳寺の麓の集落と同様に石垣の土台がないので、浜地に密集して建てられたものと考えられる。

一方、役場や郵便局の後方の家屋は、いずれも石垣の土台の上に建てられており、現在の谷及び中ノ谷地区のように、急な傾斜地を石垣・石段によって克服して、家が建てられているものと考えられる。また、大波磯地区の小学校は、串ヶ脇地区への移転後、船舶や漁網用の浜として利用されている。更に、島内の中心地海道地区と串ヶ浜地区との間の新地区は、大正末期から昭和初期の埋め立てにより造成されたので、明治末期と推定される両図には記載がない（7）。

#### 〈集落構造と変化〉

一般的に離島や漁村地域においては、職業別あるいは階層別居住分化が見られるが、保戸島においては明確には区分出来ない。しかし、聴き取り調査によると、船主及び商店などは浜小路・新地・海道など平坦地あるいは港に近接した地区に比較的多い。

一方、船子・船員などは傾斜地に多く居住している。その結果、漁業の好況に伴う所得水準の上昇による鉄筋コンクリート住宅への新・改築は海岸に近い地区に著しく、逆に木造家屋の残存率は山地部（傾斜地）程高くなっている。

表2により地区別の木造・鉄筋家屋率を見ると、木造家屋率は、上小路の八三・八%を最高に、新地の三四・六%まで、地区によってかなりのばらつきがあるが、概して海岸からの距離との相関が強く、傾斜地（内陸部）程高い数値を示している。また、木造住宅に関して上小路・谷両地区では、二階建てが平屋を上回っていることと、地形的制約上三階建てが余り見られない点が注目される。

他方、鉄筋コンクリート（あるいはブロック）住宅の建て替え率の高い地区は木造住宅率の低い地区で、殆ど



表2 地区別住宅分類

(単位：戸、%)

地区名	木造住宅				鉄筋ブロック住宅					合計
	1階建	2階建	3階建	小計	1階建	2階建	3階建	4階建	小計	
串ヶ脇	34(24.1)	31(22.0)	1(0.7)	66(46.8)	3(2.1)	42(29.8)	30(21.3)	0	75(53.2)	141
新地	25(19.2)	14(10.8)	6(4.6)	45(34.6)	4(3.0)	45(34.6)	34(26.2)	2(1.5)	85(65.4)	130
浜小路	6(5.9)	38(37.3)	4(3.9)	48(47.1)	0	29(28.4)	23(22.5)	1(1.0)	53(52.9)	101
上小路	43(35.8)	56(46.7)	1(0.8)	100(83.8)	0	10(8.3)	9(7.5)	1(0.8)	20(16.2)	120
谷	14(21.9)	25(39.1)	1(1.6)	40(62.6)	0	13(20.3)	10(15.6)	1(1.6)	24(37.4)	64
大波磯	2(5.6)	13(36.1)	0	15(41.7)	0	7(19.4)	14(38.9)	0	21(58.3)	36
合計	124(20.9)	177(29.9)	13(2.2)	314(53.0)	7(1.2)	146(24.7)	120(20.3)	5(0.8)	278(47.0)	592

注1. ただし、谷地区には海道地区が、上小路には中谷地区が含まれる。

2. ( )内は、その地区における各住宅が占める割合

3. 実地調査によって作成(ただし、昭和51年7月現在)。

『大分県地理』第14集(昭和57年)による。

の地区で二階建て以上の多層階の住宅となっている。中でも新地地区が六五・四%と高率を示していることと、大波磯地区では三階建て以上が全体の三八・九%と大きな割合を占めているが、これは一戸当たりの敷地面積の狭溢性と地価の高さのためと考えられる。

更に、保戸島における鉄筋ブロック造りの多層階化は日照状態を悪化させ、一日中陽の当たらない部屋も生まれている(8)。

〈家屋構造〉 柳田国男は

二階と下と別々に入口を路につけて二戸三房が一棟の中に住んで居るとか

よほど気をつけぬと同じ家へ二度入って笑われると書いているが、傾斜地と絶対的居住空間を克服する方法として、木造三階建て住宅がある。従来は、かなりの数にのぼっていたと思われるが、昭和五十二年現在でも十三戸残っている。その家屋構造は図4に示すように、玄関は二階の上側の道路に面した入口に設けられ、勝手口は、下の一階の傾斜面の階段に面している。

部屋の配置は、基本的には田の字型構造であり、冠婚

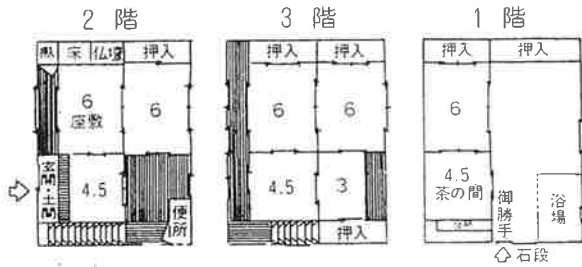


図4 住宅見取図 (木造3階建て)  
 注: 新地地区N氏住宅・昭和15年建築  
 『大分県地理』第14集 (昭和57年) による。

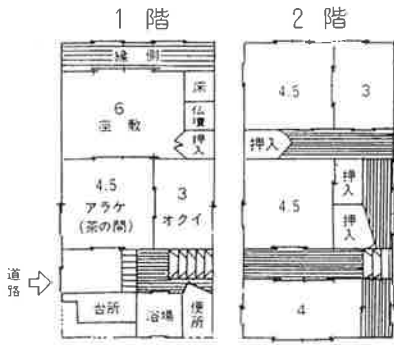


図5 住宅見取図 (木造2階建て)  
 注: 浜小路地区Y氏住宅・昭和15年建築。  
 同52年鉄筋住宅に改築予定  
 『大分県地理』第14集 (昭和57年) による。

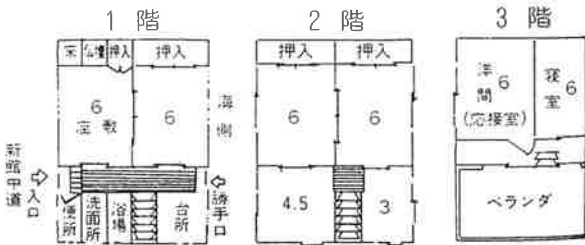


図6 住宅見取図 (鉄筋ブロック3階建て)  
 注: 新地地区 (地下物置・地下水槽付)・昭和50年建築  
 『大分県地理』第14集 (昭和57年) による。

葬祭の時は、襖をはずせば広い座敷が確保される仕組みになっている。図4は、昭和十三年(一九三八)十二月の新地地区の火災後に建築された典型的な木造三階建て住宅である。

また、部屋の呼称にしても図5に示すように、食事を

新しいタイプとして図6に示すように、鉄筋二階建て

する茶の間を「アラケ」、その隣の寝室を「オクイ」と呼んでいたが、現在ではかなり廃れている。そして、最上級の部屋は「座敷」と呼ばれ、仏壇と床の間が設けられ、客間としての機能も兼ねている。

あるいは三階建てが一般的である。その特徴として、住宅内の公的スペースの分離が挙げられる。つまり、最も重要視される座敷（仏間）を一階の玄関の隣に配置し、その襖を開ければ全体で十二畳の広間が出来、行事や寄り合いなどの公的な機能を果たすことが出来る。二階から上は一応私的スペースとして、寝室・子供部屋となっているが、基本的パターンは依然として田の字型構造であり、個人のプライバシーの確保は十分ではない。

新しい傾向として、三階に寝室（洋間）を設け、夫婦のプライバシーの確保をしたことと、その隣に洋間の応接室を造り、カーペット・高級応接セット・サイドボード・ステレオなど的高级耐久消費財を入れて生活を楽しむスペースを取り入れたことである。つまり、一、二階は、従来の部屋の配置（間取り）の鉄筋住宅化であるが、三階は核家族を主体とするファミリー指向のパターンが見られることである（9）。

辛酸をなめた飲料水

鉄筋住宅の新しい特色として、ほとんどの家が、地下に物置きと地下タンクを設置していることである。離島にとつて

従来からの最大の問題は、生命線ともいべき飲料水の確保である。

昭和三十六年に簡易水道が開通するまでは、水問題では辛酸をなめた。夏の渇水期における井戸水の塩分干渉問題、井戸の蓋の施錠や水番、四浦半島への水汲みなど、多くの苦労があった。上浦町の大浜の集落へも水汲みに行っている。新・改築の際には、地下に水槽（タンク）を作り、常時三〇立方メートルの水を確保しており、断水や渇水期になっても心配が大幅に軽減した。

保戸島には、井戸は共同のものと個人のものとのを合わせて約百二十あるが、現在、井戸は水道の普及により、飲料水として用いている所はほとんどなく、洗濯や日常の洗いのなどに使用されている場合が多い（10）。

しかし、昭和三十五年に四浦半島の仁宅ダムから海底送水によって水道が敷設されたが、水量不足のため、平成年代になってからも同様の状態で、渇水期には給水船で水の運搬を行っている（11）。

注（一） 柳田国男『海南小記』（平凡社 昭和四十一年）

- 2 中野雅博『大分県保戸島の漁村の変貌』（『大分県地理』第一四集 大分県地理学界 昭和五十六年）
- 大分大学芸学部地理学研究所『豊後水道沿岸の四島―保戸島・無垢島・屋形島・深島』（『大分県地理』第三集 大分県地理学界 昭和三十七年）
- 3 (1) に同じ
- 4 (1) に同じ
- 5 (2) に同じ
- 6 両図の年代は不祥であるが、明治四十二年開局の郵便が記載されているので、明治末以降であることが分かる。また、新地地区に家が見られないので、大正末頃までのものと考えられる。
- 7 (2) に同じ
- 8 (2) に同じ
- 9 (2) に同じ
- 10 矢野彌生『保戸島の漁業集落』（『津久見市誌』津久見市 昭和六十年）
- 11 『離島振興三十年史』（全国離島振興協議会 平成二年）

◇ 新刊紹介

『豊後の国佐伯』

今年には国木田独歩が佐伯に来て一〇〇年目を迎えます。「独歩一〇〇年記念事業」実行委員会（独歩会・武藤等会長）では記念事業に先立って、佐伯にゆかりある独歩の小品、小説、日記、手紙などを集めた作品集を刊行しました。

内容は中学生にも読みやすいように教科書式に校正されています。佐伯市民や出身者には必携の一冊とお勧め申し上げます。

新書版一五九ページ 七〇〇円

